

されてきた。たとえば、検索語の入力時に候補となる語を補完して表示するキーワードサジェストなどは開発版の段階では実装されていたが、検索速度の低下などのために正式公開版では実装されていない。また、利用者のパーソナルデータを登録し、利用者の属性に応じた検索結果の適合度順出力や図書の推薦をしようとする仕組みなども計画され、実験も行われていたが、現時点では実装されていない。これらの機能を提供するかどうかも含め、NDLサーチに今後実装すべき機能の検討を深め、よりよいシステムへと改良を続けていきたい。

4. NDLサーチへの期待

現在、図書館サービスに対する利用者の期待は大きく変化してきている。図書館も、その期待に合わせて変化していく必要がある。その際、図書館に来館する利用者に対するサービスだけではなく、非来館者も含む潜在的な利用者に対するサービスの提供も考慮することが重要と考えられる。ただし現時点では広い範囲の利用者がどのようなサービスを必要としているかについては明確とはなっていない。ニーズを把握するためには、失敗をおそれずに、試行的に新たなサービスを導入し、その結果を受けて改良するというやり方が必要な場合もある。

著者自身も、Project Next-Lにおいて新しい図書館システムの仕様を策定するために、多くの図書館関係者の意見を集めることを目指したことがある。その時、単に意見を寄せて欲しいというだけでは集めることは困難であり、まずは実際に動くシステムを作成し、それを使ってもらうことで初めて多くの意見が寄せられるということを経験した⁽⁵⁾。

NDLサーチのようなシステムにとって重要なことは、最初の一歩を踏み出すことと、その後も継続的な改良を続けていくことである。NDLでは「次世代システム研究開発室」でNDLサーチを含めた様々なシステムの研究と開発が続けられることになっている⁽⁸⁾。NDLサーチの今後に大いに期待したい。また、多くの人々にも期待して欲しいと願う。

(同志社大学：原田隆史)

- (1) “国立国会図書館サーチが正式サービスとなりました”. 国立国会図書館サーチ. 2012-01-06. http://iss.ndl.go.jp/information/2012/01/06_release/, (参照 2012-01-07).
- (2) たとえば、以下の論文などがあげられる。
片岡真ほか. 図書館の検索インターフェースとユーザ支援技術. メディア教育研究. 2011, 7(2), p.19-31.
兵藤健志ほか. 九州大学附属図書館における Cute.Catalog のデザインと開発: OPAC からディスカバリ・インターフェースへ. 情報管理. 2010, 53(6), p. 311-326.
また、以下のようにディスカバリインタフェースではなく、次世代 OPAC という表現で紹介しているものも存在する。
久保山健. 特集, ファインダビリティ向上: 次世代 OPAC

- を巡る動向: その機能と日本での展開. 情報の科学と技術. 2008, 58(12), p. 602-609.
- 宇陀則彦. 特集, ウェブ検索時代の目録: 利用者中心の設計: 次世代 OPAC の登場. 図書館雑誌. 2009, 103(6), p.390-392.
- (3) 「書誌レコードの機能要件」(Functional Requirements for Bibliographic Records) のこと。
 - (4) 日本出版インフラセンター (JPO) が運営する、近刊書誌情報の集配信とその標準的な運用を行うためのセンター。JPO 近刊情報センター. <http://www.kinkan.info/>, (参照 2012-02-21).
NDLサーチとの連携については以下を参照。
“近刊図書情報の提供開始、書誌情報の RDF 出力機能リリースのお知らせ (2012年2月2日)”. 国立国会図書館サーチ. 2012-02-02. http://iss.ndl.go.jp/information/2012/02/2_release/, (参照 2012-02-21).
 - (5) 日本点字図書館がシステムを管理し、全国視覚障害者情報提供施設協会が運営を行う視覚障害者への情報提供ネットワークシステム「サピエ」が提供するサービスの一つ。サピエ図書館. <https://library.sapie.or.jp/>, (参照 2012-02-21).
NDLサーチとの連携については以下を参照。
“障害者向け資料検索機能の追加、アクセシビリティ対応のお知らせ (2011年9月12日)”. 国立国会図書館サーチ 2011-09-12. http://iss.ndl.go.jp/information/2011/09/12_release/, (参照 2012-02-21).
 - (6) 谷口祥一. FRBR OPAC 構築に向けた著作の機械的同定法の検証: JAPAN/MARC 書誌レコードによる実験. Library and Information Science. 2009, (61), p. 119-151.
 - (7) 原田隆史. Project Next-L と Next-L Enju: 日本初のオープンソース統合図書館システムの開発と現状. 情報管理. 2012, 54(11), p. 725-737. http://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/54/11/54_725/_article/-char/ja, (参照 2012-02-14).
 - (8) 中山正樹. 国立国会図書館におけるデジタルアーカイブ構築: 知の共有を目指して. 情報管理. 2012, 54(11), p. 715-724. http://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/54/11/715/_pdf/-char/ja, (参照 2012-02-14).

CA1763

引用分析による蔵書評価

1. ウェブ時代と蔵書評価

ウェブ時代と言われる今日、情報資源がウェブ上に溢れ、国立国会図書館サーチ (NDL Search)⁽¹⁾、J-GLOBAL⁽²⁾、CiNii⁽³⁾など、求める学術情報を効率よく見つけ出せる新しい検索サービスが次々と公開されている。しかし、ウェブ上の学術情報のなかには、利用できる範囲が書誌情報や抄録までだったり、本文の閲覧が有料だったり、会員限定だったり、誰でも無条件で本文を入手できるようにはなっていない場合が少なくない。

図に、全国の大学図書館におけるサービス件数を示した⁽⁴⁾。2000年以降、相互利用の複写依頼件数が顕著に減少し、電子ジャーナルの普及の効果をうかがわせる。他方、館外貸出サービスや相互貸借の借受件数は高い水準を維持している。図書館の利用者は、ウェブ上の情報資源を活用しながら、個人では入手しにくい文献を図書館から入手しているのであり、図書館の蔵書の重要性が低下していないことがわかる。

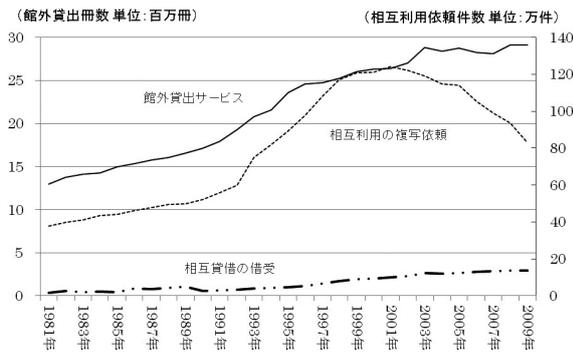


図 全国の大学図書館におけるサービス件数

出典：註(4)の資料を基に筆者が作成

各図書館は、電子ジャーナルなどの電子資料の経費負担が高まるなか、蔵書の強みと弱みを把握し⁽⁵⁾、弱みがあれば補う蔵書評価(collection evaluation)を行って、蔵書の効率化を進める必要がある。近年、海外では蔵書評価に対する関心が高まり、引用分析(citation analysis)を用いた蔵書評価に関する論文が相次いで発表されている⁽⁶⁾。

なお、本稿では、図書館を設置している組織の構成員を「構成員」といい、構成員の著作に掲載されている引用文献を「被引用文献」と呼ぶ。被引用文献には構成員の資料のニーズが反映されていると捉え、被引用文献を用いて蔵書評価を行う手法を、引用分析による蔵書評価という。

2. 引用分析と蔵書評価

引用分析は、計量書誌学(bibliometrics)の重要な分析手法であり、幅広く応用されている。引用分析の主な目的は次のとおりとされている⁽⁷⁾。

- (1) 研究上最も生産性が高い著者や部署、大学、国を明らかにすること
- (2) 研究分野の核となる文献(core literature)を明らかにすること⁽⁸⁾
- (3) 書誌的な形態や言語、書誌的な寿命(出版後の経過年数)について、研究分野における特徴を分析すること
- (4) 先端的な研究活動について明らかにすること
- (5) 資金提供を受けている研究とそうでない研究を比較して評価すること

(1)では、引用頻度が高い文献の著者やその所属する部署・大学・国は、研究の生産性が高いと捉える。(2)では、引用頻度が高い文献はその研究分野における影響力が強いと捉える。(3)では、引用文献の書誌的な形態や言語、出版年ごとに引用頻度を集計し、引用頻度が高い文献は利用頻度が高いと捉える。(4)では、引用頻度が高い研究は注目度が高いと捉える。(5)では、引用頻度が高い研究は影響力が強くて研究成果

が高いと捉える。引用分析による蔵書評価は、(3)の応用の一つである。

3. 様々な蔵書評価の手法

日本の大学図書館では、図書館が蔵書構築のリーダーシップをとることは少なく、主に教員が選書を行っており、蔵書評価の事例は決して多くはない(CA1734参照)⁽⁹⁾。他方、米国では、様々な蔵書評価の手法が開発され、実践されている。三浦らは、引用分析による蔵書評価を「利用者中心評価法」の一つとし、次のように整理したうえで、「引用分析は、チェックリスト法の変形とみなすことができ、標準的な書誌や文献リストを利用できない分野で特に有効な手法である」と述べている⁽¹⁰⁾。

(A) コレクション中心評価法

- (1) コレクション統計の作成
- (2) 基準の適用
- (3) 直接観察法
- (4) チェックリスト法
- (5) 一般書誌抽出法
- (6) コレクション重複度調査

(B) 利用者中心評価法

- (1) 貸出調査
- (2) 館内利用調査
- (3) 引用分析
- (4) 入手可能性調査
- (5) リクエスト資料調査⁽¹¹⁾

4. 引用分析による蔵書評価の手順

引用分析による蔵書評価では、様々な観点から蔵書进行评估することができる。このため、実施計画の段階で、蔵書評価の目的や対象、経費、実施期間、実施体制を明確にし、これらに合った調査対象や規模、手順を検討する必要がある。

次に、一例としてミラー(Laura Newton Miller)によるカナダのカールトン大学の事例にもとづき、引用分析による蔵書評価の手順を示す⁽¹²⁾。

- (1) 蔵書目録で生物学分野の学位論文を検索し、構成員の修士論文25件から被引用文献2,783件を集めた⁽¹³⁾
- (2) 被引用文献を資料形態別(雑誌/図書/モノグラフ/ウェブサイト/その他)に区分した
- (3) 図書館で被引用文献を所蔵しているか調査した
- (4) 学問分野別(細胞分子生物学/生態学・進化・行動/生化学・生理学/生命工学・バイオインフォマティクス)に区分した
- (5) 資料形態別、タイトル別、出版後の経過年数別、学問分野別に集計した

ミラーは、以上の調査結果にもとづき、被引用文献の掲載雑誌2,340タイトルのうち170タイトル(7%)を所蔵していないこと、図書が327件と被引用文献全体の11%を占めよく利用されていること、よく引用される雑誌の分野別の順位、などがわかったとしている。

5. 引用分析による蔵書評価の長所と短所

米国図書館協会(ALA)の『ALA蔵書の管理と構成のためのガイドブック』には、引用分析による蔵書評価の長所と短所が次のとおり挙げられている⁽¹⁴⁾。

● 長所

- (1) 分析のためのカテゴリーにデータを分類するのが容易である
- (2) 方法が非常に簡単なので、繰り返して使うことができる
- (3) 刊行される文献の傾向の変化を発見することができる
- (4) リストは、オンラインのデータベースを活用すれば、効果的にすばやく作成することができる

● 短所

- (1) 研究されている主題分野や各館の利用者のニーズをよく反映する典拠文献を選定することが困難である
- (2) ある学問分野の下位領域が、その主題全体とは違う引用パターンを持っていることもある
- (3) 引用調査が適用できない研究パターンの学問分野もある
- (4) 引用に常にみられるタイム・ラグのために、学問分野の重心の変化、あるいはコア・ジャーナルの出現がわからない

これらの短所にみるとおり、引用分析による蔵書評価は全ての館種、全ての学問分野で効果的なわけではない。館種では、構成員の著作から被引用文献を集めやすい大学図書館で主として実施されている。学問分野では、人文科学から自然科学に至るまで幅広く実施されているが⁽¹⁵⁾、学問分野によって引用の習慣が異なることに配慮が必要である。しかし、長所を生かして蔵書評価を試みることにより、蔵書構築の効率化への第一歩とすることができるだろう。

短所の(1)については、例えば農学分野の学生の学習支援を重視して蔵書評価を行うなら、その学部の卒業論文を用いるというように、蔵書評価の目的に合わせて被引用文献を集める資料を選択するなどの工夫が必要である。(2)については、分析対象とする学問分野を細分化して分析し、学問分野によって引用パターンに違いがあれば明確になるように配慮が必要である。(3)については、利用者へのインタビュー調査など、他の分析手法を組み合わせることが考えられる。

(4)については、被引用文献を掲載する最新の論文や報告書、レポートなどを入手するなどといった工夫が必要である。

6. まとめ

ウェブ時代が到来しても図書館の蔵書の重要性は変わっていないが、今後も継続して、ウェブ時代の迅速な情報利用に慣れ親しんでいる利用者の支持を獲得し、今までと同様に図書館が学術情報流通における要の位置を占めるためには、蔵書評価を行って蔵書の強みと弱みを把握し、弱みがあれば補うことが重要である。引用分析による蔵書評価は、利用者にも図書館にも比較的負担が少ない方法であり、蔵書評価にふさわしい分析方法といえる。

(筑波大学附属図書館：^{きたによろこ} 気谷陽子)

- (1) 国立国会図書館サーチ. <http://iss.ndl.go.jp/>, (参照 2012-02-14).
- (2) J-GLOBAL. <http://jglobal.jst.go.jp/>, (参照 2012-02-14).
- (3) CiNii. <http://ci.nii.ac.jp/>, (参照 2012-02-14).
- (4) “学術情報基盤実態調査結果報告”. 文部科学省研究振興局情報課学術基盤整備室. <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001015878>, (参照 2012-02-14).
なお、統計項目は「6-5 館外貸出サービス」の貸出冊数合計、「6-8 図書館間相互協力の依頼件数」の図書・雑誌の貸借の借受合計および文献複写の依頼合計を用いた。横軸は調査対象年を用いた。
- (5) 本稿では、利用者が求める文献を迅速に提供するという目標の達成について、貢献する蔵書の特質を強みといい、障害となる蔵書の特質を弱みという。
- (6) 例えば次の論文がある。
Miller, Laura Newton. Local Citation Analysis of Graduate Biology Theses: Collection Development Implications. *Issues in Science and Technology Librarianship*, 2011, (64).
<http://www.istl.org/11-winter/refereed3.html>, (accessed 2012-02-14).
Knight-Davis, Stacey et al. Analysis of Citations in Undergraduate Papers. *College & Research Libraries*, 2008, 69(5), p. 447-458.
<http://crl.acrl.org/content/69/5/447.full.pdf>, (accessed 2012-02-05).
- (7) Nisonger, Thomas E. *Collection Evaluation in Academic Libraries: a Literature Guide and Annotated Bibliography*. Libraries Unlimited, 1992, p. 97.
- (8) 関連する既存の評価指標に、インパクトファクターがある。インパクトファクターは、研究分野の核となる雑誌 (core journal) に関する評価指標で、特定の雑誌が世界的で有力な雑誌に掲載された論文に引用された回数にもとづいて算出される。インパクトファクターは各図書館の利用者のニーズとは関わりがないため、蔵書管理に利用する際には、利用者のニーズについて別途配慮する必要がある。“インパクトファクターの調べ方”. トムソン・ロイター, 2011.
http://ip-science.thomsonreuters.jp/media/support/jcr/ImpactFactor_QRC.pdf, (参照 2012-02-05).
また、引用分析ではないが、電子ジャーナルをはじめとする電子資料の多くでは、COUNTER (Counting Online Usage of Networked Electronic Resources) に準拠した利用統計が提供されており、電子資料がどの様に利用されているかタイトル毎に確認できる。
加藤信哉. COUNTERについて. *薬学図書館*, 2007, 52(3), p. 258-269.
- (9) 次の文献に、日本における蔵書評価に関するレビューがある。
国立国会図書館関西館事業部図書館協力課. 蔵書評価に関する調査研究. 2006. 144p. (図書館調査研究リポート, 7).
http://current.ndl.go.jp/files/report/no7/lis_rr_07.pdf, (参照 2012-02-18).
- (10) 三浦逸雄ほか. *コレクション形成と管理*. 雄山閣, 1993, p.

234. (講座図書館の理論と実際, 2).
- (11) 三浦逸雄ほか. コレクション形成と管理. 雄山閣, 1993, p. 222-242. (講座図書館の理論と実際, 2).
- (12) Miller, Laura Newton. Local Citation Analysis of Graduate Biology Theses: Collection Development Implications. *Issues in Science and Technology Librarianship*, 2011, (64).
http://www.istl.org/11-winter/refereed3.html, (accessed 2012-02-14).
- (13) 一般に、雑誌論文の被引用文献は、図書が少なくして雑誌論文が多い。このため、主として図書を評価対象として引用分析による蔵書評価を行う場合は、学位論文や報告書など、図書が比較的多く引用される資料形態を用いる必要がある。
- (14) アメリカ図書館協会図書館蔵書・整理業務部会編. "引用調査法". 青木良一ほか訳. ALA 蔵書の管理と構成のためのガイドブック. 日本図書館協会, 1995, p. 56-57.
- (15) 人文科学の事例として以下の文献がある。
Knievel, Jennifer E. Citation Analysis for Collection Development: A Comparative Study of Eight Humanities Fields. *Library Quarterly*, 2005, 75(2), p. 142-168.
また、社会科学の事例としては次の文献がある。
Popovich, Charles J. Business/Management Research Characteristics and Collection Evaluation: A Citation Analysis of Dissertations. ERIC. 1975, 24p.
http://www.eric.ed.gov/PDFS/ED136835.pdf, (accessed 2012-02-14).
そして、自然科学の事例では以下の文献が挙げられる。
Greene, Robert J. Computer Analysis of Local Citation Information in Collection Management. *Collection Management*. 1993, 17(4), p. 11-24.

CA1764

ライデン大学図書館特別コレクション室における研究促進とデジタル化

はじめに

写本や文書資料等は、唯一無二であるという点で一般的な図書館資料とは異なる。また、装丁や来歴、コレクション構成に歴史的重要性が見出される資料群は、その特性が維持されることが望ましい。そのため、このような資料は、多くの図書館で「特別コレクション」などと呼ばれて一般資料とは異なる管理や提供が行われてきた。

近年、特別コレクションは各館の重要な資産であるということが再認識されている。図書館経営という視点から見た場合、関連する研究を促進したり、展示会や広報誌刊行等のPR活動に用いたりすることにより、各館の存在感を社会に示すことができるからである。一方、図書館サービスのオンライン化、学術環境のデジタル化は、特別コレクション室の業務の再編を促している。

本稿では、筆者が2009年8月から2011年8月まで滞在したオランダ・ライデン市にある、ライデン大学図書館特別コレクション室の近年の取組みについて、研究促進とPR活動、学術環境のデジタル化とそれへの対応という視点から見ていく。

1. 図書館概要・所蔵資料

ライデン大学は、オランダがスペインによる支配か

ら解放されてもまもない1575年に設立された。近隣の西欧諸国で絶対君主による統制が強まる中、共和国オランダのライデンには欧州各地から進歩的な学者が集まり、宗教・思想・学問の自由を謳歌した。

ライデン大学図書館は1587年に設置された。以来4世紀余、海洋貿易の発展や植民地経営を背景に、多様な文化圏の多様な形態の資料を蓄積してきた。1980年代に現在の図書館本館が竣工し、目録の機械化が始まる。2007年から、建物改修を伴った組織と業務の再編が進行中である。2009年には、各学部が維持していた図書館が、医学部図書館を除いて統合され、2012年現在、本館と4つの分野別図書館で、図書約300万冊、電子ジャーナル約3万タイトル、電子書籍約100万冊等が提供されている⁽¹⁾。職員数は、2010年には、フルタイム換算値(FTE)で117.2人である⁽²⁾。

ライデン大学図書館特別コレクション室は、本館南棟の3階にある。平日の9時から17時半まで、ライデン大学の学生・教職員に開放されている。他大学の学生・教職員も、国籍を問わず、利用証を申請すれば閲覧が可能である(図1参照)。同室の運営は、コレクション専門司書課とコレクションサービス課という二つの課からなる特別コレクション部が行っている。2012年1月現在、コレクション専門司書課にはFTEで5.8人、コレクションサービス課には14.0人配置されている⁽³⁾。



図1 特別コレクション室の利用風景

特別コレクション室の主たる資料群として、写本、大学関係文書、書簡、中世オランダ語資料を中核とする西洋写本コレクション、インキュナブラを含む1801年以前の西洋刊本コレクション、ライデンで活躍した学者が所蔵していた中近東言語資料と彼らの著作を中核とするオリエンタル・コレクション、オランダ勢力下にあった東南アジア地域の書籍・行政文書コレクション、および写真・版画・絵画コレクションがある。日本との関係でいえば、長崎・出島のオランダ商館員